

一、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

赤尾先生は、六年三組の担任で、車いす生活を送っています。紺野先生と白石先生は補助の副担任の先生です。

運動会は、三日後に迫っていた。ほかのクラスは、すでに四段タワーを成功させている。まだ一度も成功させていないのは、三組だけだった。^①赤尾は迷っていた。前日の学年会議で、主任の青柳に四段目の変更を迫られていたのだ。

「赤尾先生、あと四日しかないんです。このままでは三組だけが恥をかくことになりますよ。そうならば、四段目の工藤君はどう思うでしょう。自分の責任だと深く落ちこみ、結果的に彼を傷つけることになるんじゃないですか」

青柳の意見は、もつともだった。「公彦を信じる」と言えば聞こえはいいが、それは子どもたちの個性を適正に配置するという、担任としての責任を放棄しているだけなのかもしれない。運動会当日にしっかりと四段タワーを完成させ、子どもたちに充実感を味わわせることこそ、担任のつとめなのではないだろうか。

※（今日がリミットだな……）

赤尾は、この日の練習でも公彦がのぼれそうになれば、慎吾にそのポジションを代わってもらうつもりでいた。もちろん、公彦がのぼれるようになれば、それに越したことはない。赤尾は、いつも以上に祈るような気持ちで子どもたちのチャレンジを見守っていた。

そんな赤尾の思いが伝わったのか、^②この日の公彦はいつもと様子がちがっていた。康平たち三段目が準備を終えると、ためらうことなく一段目の泰示に足をかけ、二段目へ。さらに康平の肩に右腕を回し、陽介の肩へと左腕を回している。そして、キツとにらみつけるような視線で顔を上げると、軽くうなずきながら、「いち、にの——」とリズムを取りはじめた。それでも踏んぎりがつかず、

しばらくは「いち、にの……」とくりかえしていたが、ついに意を決して、「さんっ!」。公彦の小さな体が躍った。

右足を康平の腰のあたりに、左足を陽介の腰のあたりに置く。あと、ひと息。そこから少しずつ足の位置を動かして、ふたりの肩の上に両足を置くことができた。あとは、しゃがんだ康平たちが笛の合図^Aで立ちあがり、さらに公彦も立ちあがってポーズを取ることでできれば完成だ。

「ピッ」

紺野の力強い笛の音が、校庭に響く。康平たちは、「せーの」というかけ声とともに、ゆっくりと腰を上げた。公彦の目線が、ぐんぐん上昇していく。

「わっ」

急に開けた視界に戸惑ったのか、公彦はぎゅっと目をつぶった。同時にバランスを失う。

「あ、あ、あーっ」

小さな体が、タワーの頂上から両手をバタつかせて落ちていく。近くで見守っていた紺野が、白石が、なんとか抱きとめようと走りよるが、あと一歩、間にあわない。

ドサッ。

「痛っ!」

さけび声をあげたのは、四つんばいの体勢で地面に伏せていた泰示だった。公彦の体は、校庭に叩きつけられるスンゼン^Bに泰示の左肩にぶつかり、そこから校庭に転げたのだった。

「だいじょうぶか!」

駆けよる紺野と白石。そのうしろから車いすの赤尾が続いた。

「痛ってえな、何すんだよ!」

泰示が左肩を押さえながら顔をしかめている。苦痛に顔を歪めてはいたが、いつもの威勢は失っていない。

「公彦!」

下じきになった泰示の無事は確認できたが、地上三メートル近い位置から落下した公彦は校庭で仰向けになり、^③大声をあげて泣きじゃくっている。骨でも折れているのかもしれない。白石が小さな体をそっと抱きおこした。公彦は、まだ嗚咽をもらしている。

「えっ……」

白石は、耳をうたがった。腕のなかでふるえるメガネをかけた少年は、けっして痛みから涙を流しているわけではなかったのだ。

「チクショー。あと、ちよつとだったのに。チクショー……」

時計の針は、三時四十分を指していた。子どもたちの机の上には、帰りの準備をすませたランドセルが置かれている。公彦と泰示は保健室で診てもらったが、ふたりとも打撲程度の症状ですんだようだった。

いつもはにぎやかな帰りの会。だが、この日はだれひとりとして口を開かず、教室は重い空気に包まれていた。康平はランドセルの上にあごをのせて、両腕をだらりと前にたらしめている。陽介はずっと自分の指先を見つめ、爪をいじっていた。教卓の前に立つた赤尾は、そんな子どもたちをゆっくりと見わたした。

「あと三日だな」

ちらりと視線を送ってくる子どもはいたが、とくにそれ以外のハンノウはない。

「女子のピラミッドは、だいじょうぶそうだな。練習でやってきたことが出せれば、きっと本番もだいじょうぶだ」

赤尾の言葉にも、京子たち数人の女子がわずかにうなづくばかり。

「男子は、正直、ちよつと心配だ。なんせ、練習でまだ一回も成功してないからな。どうだ、本番までになんとかなりそうか？」
「なるわけないだろ」

泰示が吐きだすように言った。^④ほかの男子は気まずそうな顔でうつむいている。公彦は、申しわけなさそうに身を縮めていた。^E

「じゃあ、泰示はどうしたら成功すると思う？」
赤尾の問いに、泰示は一気にまくしたてた。

「そんなのかんたんだろ。公彦をやめさせりゃいいんだよ。やっぱり、四段目はこいつじゃムリだったんだよ！」
クラスのだれもが感じはじめていたことだっただけに、泰示の言葉に教室は静まりかえった。

(ここまでかな……)

赤尾は、最前列にすわる慎吾にちらりと視線を送った。代役として自分に白羽の矢が立つだろうことを薄々感じていたのか、慎吾はぜったいに赤尾と目を合わせようとはしなかった。

「あの……」

立ちあがったのは、公彦だった。地面にぶつかったせい、トレードマークのメガネは、大きく左にかたむいている。

「ずっと迷惑をかけてるぼくがこんなこと言っているのかわからないんだけど……やっぱり、ぼく、どうしても四段目をやらせてほしいんです。これまでは失敗ばかりだったけど、でも、本番ではぜったいに成功させるから、お願いだからぼくにやらせてください」

公彦は、深く頭を下げた。^⑤あきらかに困った表情で顔を見合わせる子どもたち。沈黙を破ったのは泰示だった。

「やだね。おまえのワガママで、こっちはずっと痛い思いしてるんだよ。だいたい、なんで『ぜったいに成功させる』なんて言えるんだよ。だったら、練習でもできるはずだろ」

言い方は乱暴だが、けつして的外れな意見でもなかった。

「うん、泰示君の言うとおりだよ。でも、ぼく、強くなりたくって……。あのね、みんなはぼくのこと、"教授"って呼ぶでしょ。自分でもそう呼ばれてると、『ぼくは勉強さえしっかりやっていればいいかな』とか、『まあ、ほかのことはできなくてもいいか』なんて思っちゃって、いろんなことから逃げてた気がするんだ。でも、もうそんな自分とはサヨナラしたくって。せつかく、みんながつけてくれたあだ名でしょ。だから、だから――」

^⑥もう、あとは言葉にならなかった。

「いいんじゃない」

口を開いたのは、康平だった。

「オレも昨日までだったら反対してたけどさ。今日はちゃんとのぼってたじゃん。逃げずにチャレンジしてたじゃん。だったら、教授でいいんじゃないの」

ぶっきらぼうな言葉だが、そこには温度^⑦があった。立ちあがった陽介が続いた。

「今日はオレたちの肩の上まで来れたんだからさ、あとちよつとだよ。もつと教授がのぼりやすいようにオレたちもしっかり立つからさ、あと三日、がんばろうぜ」

二人の言葉に続いて、ほかの子どもたちからも「だいじょうぶだよ」「がんばろうな」という言葉が続きつぎとかけられた。
「ありがとう。みんな、ありがとう……」

公彦の顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。だが、ひとりだけ仏頂面^{ぶつちやうめん}で腕組み^{うでぐみ}をしていた泰示は、不服^{ふふく}そうに鼻を鳴^ならしていた。

「バカらしい。おまえらだけで勝手にやれよ。オレはもうごめんだね。やめた、やめた」

そう言っただけで立ちあがると、うしろの扉^{とびら}から出ていってしまった。

「おい。泰示、待てよ！」

車いすの赤尾が、あわてて追いかけていく。それは、三組のいつもの光景だった。

廊下^{ろうか}を進んでいった泰示は、だれもない図書室に飛びこむと、なかから鍵^{かぎ}をかけた。

「泰示、先生だ。開けてくれ」

「やだね。早くあいっらんとこにもどればいいだろ」

赤尾は図書室に入ることをあきらめると、廊下^{ろうか}から扉越^{とびりこ}しに話しかけることにした。

「なあ、泰示」

「なんだよ」

「このまえの休み時間にな、二年生の男の子ふたりが先生のところに来て、『先生のクラスに体の大きなお兄ちゃんいますか』って言うんだ。先生の机に集合写真があったから、それを見せたら、泰示のこと指さして、『あ、このお兄ちゃん』って」

「だから、なんだよ」

扉の向こうから、泰示^{やすし}のいらだちが伝わってくる。赤尾は話を急いだ。

「その子たち、うれしそうな顔で、『高いところのつちやったボールを、このお兄ちゃんが取ってくれたんです。ありがとうございます』

いました』って。おまえ、いいところあるな」

「べつに、そんなこと」

「それだけじゃないぞ。みんなが掃除^{そうじ}に行ってくれてる一年三組の先生が、おまえのことをほめてるんだ。『新しく入ってきた泰示君、いいですねえ。机や椅子^{いす}を運ぶときも、両脇^{りょうわき}に抱えてふたつずつ運んでくれるから、泰示君がいるとすぐに終わっちゃう。で、早く掃除が終わると一年生の子たちと遊んでくれるんです』って。ずいぶんちっちゃい子たちの面倒^{めんどう}見がいいんだな」

「そんなこと……」

強い口調にも、照れがにじむ。

「なあ、泰示。おまえは、先生に給食を持ってきてくれたり、下級生の面倒をよく見たり、自分より小さくて弱い者に、とてもやさしくできる。それって、先生はとてもすばらしいことだと思うんだ」

泰示は、黙^{だま}って聞いている。

「じゃあ、公彦はどうだろう。たしかにあいつは同じ学年、同じクラスだ。でもさ、泰示に比べれば、体も小さいし、力も弱い。どうだろう、あいつにおまえの力を貸^かしてやってくれないか。クラスのみんなが、いま泰示の強さとやさしさが必要としてるんだ。どうしてもおまえの力が必要なんだ」

「……先生も？」

「えっ」

扉越^{とびりこ}しに聞こえてきたふるえる声に、赤尾は面食^{めんく}らった。

「先生も……オレの力が必要なのか？」

「ああ、もちろんだよ。紺野先生も、白石先生も、みんな泰示の力を必要としてる」
返事はなかった。だが、しばらくすると泰示は自分から鍵かぎを開け、図書室から出てきた。

(乙武洋匡「ありがとう三組」より 一部表記・体裁を改めた)

※リミット…時間的な限界のこと

問一、——①「赤尾は迷っていた」とありますが、迷っている事柄ことばを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、生徒の名前を入れて十字以内で答えなさい。

運動会の四段タワーの四段目の かどうか

問二、——②「この日の公彦はいつもと様子がちがっていた」とありますが、「公彦」の気持ちを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中から九字で抜き出して答えなさい。

今日こそは四段タワーに、 するという気持ち

問三、——③「大声をあげて泣きじやくっている」とありますが、このときのもっとも強い気持ちとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いたい イ くやしい ウ すまない エ こわい

問四、——④「ほかの男子は気まずそうな顔でうつむいている」とありますが、この気持ちを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、生徒の名前を入れて五字以内で答えなさい。

ここに から、泰示に賛成しづらい気持ち

問五、——⑤「あきらかに困った表情で顔を見合わせる子どもたち」とありますが、「子どもたち」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 立ち上がって話す公彦に対し、本番前に怪我けがをしてしまったのに何を言っているのかとおどろいている
イ わがママを言っている公彦に、泰示が腹を立てているので、公彦を応援する気持ちおうえんを表に出せずにいる
ウ ずっと公彦を応援してきた担任の赤尾も、もう慎吾に代役をさせようと思っていることにきづいている
エ 公彦の気持ちはわかるけど、今まで一度も成功していないのに本番で成功するのは難しいと思っている

問六、——⑥「もう、あとは言葉にならなかった」の理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 早口で話したため、息が続かなくなってしまったから
イ 言い終わる前に康平が話しはじめてしまったから
ウ 涙があふれてきて、うまく言葉にできなかったから
エ 泰示の厳しい言葉に耐えることができなかったから

問七、——⑦「温度」の説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 公彦を傷つけてしまったという後悔
イ 公彦を後押ししようとする思いやり
ウ みんなの前で話すことへのときめき
エ クラスの和を乱す泰示に対する敵意

問八、——⑧「廊下から扉越しに話しかけることにした」とありますが、この話を通して「泰示」に伝えたいことを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文中から十一字で抜き出して答えなさい。

に力を貸してほしいということ

問九、——⑨「いらだち」を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

自分は公彦が四段目をやるのに□なのに、みんなが認めてくれないことにいらいらする気持ち

問十、「泰示」が四段タワーの件で了解したことを象徴している部分を文中から十八字で探し、最初の五字を答えなさい。

問十一、——A「合図」・E「縮めて」の漢字の読みを答え、B「スンゼン」・C「タラして」・D「ハンノウ」のカタカナを漢字に直しなさい。

二、次の文章を読んで、あとの各問いに答えなさい。

①冷や汗をかきながら、②うらやましくてたまらない。

人の喧嘩を見ていてそんな気持ちになったのは、ずいぶん昔、ある有名なグラフィックデザイナーの事務所に行った時のことだ。何十年もコンビを組んでいるその事務所の二人のプロフェッショナルが、感情をむき出しにして大喧嘩をしていた。打ち合わせの約束があり、それを待っている僕という部外者がいるのに、おかまいなしに意見をぶつけ合っていた。ほとんど怒鳴り合いだ。

③「すみません。いつものことなんです」

アシスタントは恐縮していたが、ものづくりの現場の迫力を見せていただいた気がして、僕は見とれてしまった。

「いいものをつくろう」と、喧嘩をするぐらい本気の二人が全力投球しているから、作品もすてきなのだ。まるで夫婦みたいに大喧嘩ができる関係性に、嫉妬すら覚えるほどだった。

長きにわたるパートナーと同じ価値観をもつことは大切だが、意見まで同じにする必要はない。むしろ、④身近に自分と違う意見の人がいることは大切だと思う。

価値観と考えや意見は別のもの。価値観は深い場所にある基盤であり、考えや意見とは、あくまでもたくさんある中での方法のひとつであって、時と場合によって変化しうるものだ。

大人になればなるほど、人はやわらかさをなくすから、自分と違う意見にふれて、ぼこぼこに叩かれたり、存分に揉まれたほうがいい。

それなのに大人になればなるほど、人はなぜか自分と違う意見を排除したくなってしまふ。長く続けば続くほど、組織の意見が単一化し、凝り固まっていくのもこのためだろう。

やわらかさをなくした偉い人が、自分と違う意見をぶつけてくる人を排除する。排除されるのがいやだから、下の人たちが意見を合わせて同調することもある。そこから、よいものなんて生まれない。新鮮な変化は起こらない。

今の僕は、新しく組織に入ってくる人を面接する立場であるが、できる限り、違う意見の持ち主を仲間として迎え入れたいと考えている。

意見が違えばぶつかるが、ぶつかるとは、本当にそれがいいのかを確認する最良の策だ。結果として自分の意見を押し通すとしても、違う意見を言ってもらえれば、いったん立ち止まって考え、よりよくすることも可能だ。ノイズにはノイズならではの価値があるのだ。

異なる意見の持ち主とは、時として喧嘩のように見える議論にもなる。

僕は基本的に、争いごとや喧嘩が好きではないが、それでも自分の一線を越える相手と対峙する時は、ぶつかってもいいし、ぶつかったほうがいい。

仕事でも、プライベートでも、大切に付き合っていく相手なら、「ここぞ」という場面では、自分の感情をぶつけられる人であってほしい。

「どうしてもわかってもらいたい」

「なんとしてでも伝えたい」

この思いが爆発するのは、相手のことが大切だからだ。どうでもいい人に対して、そんな気持ちになるはずもない。肩がぶつかった、口の聞き方が悪いという理由でする喧嘩と、僕がしたい「すてきな喧嘩」は大きく異なる。

子どもの頃、週に一度は友だちと喧嘩をしていた。相手は必ず仲が良い子だった。

嫌いだからじゃなく、もっと仲良くなりたいから、喧嘩をしていた。二人とも涙を流し、犬ころみに取っ組み合いをしてへとになり、疲れたほうが「やめよう」と言ってやめになる。

不思議なもので、喧嘩が終わると、喧嘩をする前より仲良くなる。取っ組み合うということDでキウシユウする相手の情報は半端でない。相手のことがよくわかるからだろうか。感情が丸裸になるからだろうか。

大人になった今、取っ組み合いはしないけれど、すてきな喧嘩はできる。

それにはまず、お互い丸裸になって喧嘩をすること。気取りを捨てて、本音をむき出しにすること。違う意見でも怯まず、堂々と主張すること。

そうすれば相手の弱さ、優しさを知ることができる。価値観の違いがあぶりだされることもあるが、そうしたら別の道を歩む選択もできる。

さらに、喧嘩の終わりを考えることが大切だ。僕はラグビーの試合で、終了時の合図「ノーサイド」という、戦いが終われば仲間であるという言葉が好きだ。

永遠に喧嘩を続けるわけにはいかない。いつかは終わりが来るものだが、プロレスやボクシングの試合ではないのだ。どちらかかとどめを刺し、勝ち負けをはっきりさせることを、終わりの合図にしてはいけない。

僕が見ていてすてきだな、と思う人は、喧嘩の時に自分から「ノーサイド」が言える。とどめをささない。追いつめない。必ず相手を生かす。

相手の生かしどころを確保して「ノーサイド」と言えること。これぞ、すてきな喧嘩の作法ではないだろうか。

すてきな喧嘩とは、勝ち負けを超えたところにある、相手の心と自分の心の深い愛情のかたち。

特にとどめを刺すとは、相手の顔を潰すことであり、プライドを傷つけることだ。そこから憎しみが生まれ、恨みがにじむ。そんな喧嘩は、意見を磨くことにもならず、関係を深めることにもならず、何らかの解決策にもならない。逆に復讐という、一番怖いものを引き寄せてしまう。

人間は弱いものだから、自分が強いと叫びたくなることがある。普段は紳士的で中庸な人でも、追いつめられると強さや正しさを主張してしまうのだ。

「自分が一番強い！ 君が負けで、僕が勝ちだ」と。

その時だけは、圧倒的勝利をおさめられるかもしれない。白黒つけて、すっきりするかもしれない。だが、人生において、永遠に勝ち続ける人はいないのだ。

どうしても白黒つけたいなら、結論は相手に委ねること。自分が勝っていると思っても勝ち負けのジャッジは相手にマカせること。喧嘩の目的は、もっと仲良くなることだと憶えておこう。

(松浦弥太郎「正直」より 一部表記・体裁を改めた)

※中庸：中立なこと

問一、——①「冷や汗をかきながら」とありますが、この理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア アシスタントが心配して自分に気をつかってくれているから

イ 自分のことが原因の、二人の大喧嘩に責任を感じているから

ウ 二人のあまりの大喧嘩に、どうなることかと心配しているから

エ 仕事の内容を理解できず、恥ずかしい気持ちになっているから

問二、——②「うらやましくてたまらない」とありますが、何がうらやましいのですか。文中から十字で抜き出して答えなさい。

問三、——③「いつものことなんです」とありますが、ここからわかることとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

えなさい。

ア 二人の喧嘩でいつも、アシスタントが客に謝ること

イ 二人が仕事上の意見の違いからよく喧嘩をすること

ウ 客が来るといつも、二人の間で喧嘩が始まること

エ 二人の仲が悪く、客が来ても喧嘩をすること

問四、——④「身近に自分と違う意見の人がいることは大切だ」とありますが、その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる部分を文中から二十五字で探し、最初の五字を答えなさい。

身近に自分と違う意見の人がいれば [] から

問五、——⑤「やわらかさをなくす」とありますが、これを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文中から七字で抜き出して答えなさい。

[] を受け入れなくなるということ

問六、——⑥「ぶつかる」と、この文章で反対の意味に用いられている言葉を文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七、——⑦「すてきな喧嘩」とありますが、筆者は「すてきな喧嘩」がどのようなことをもたらすと述べていますか。文中から十字で抜き出して答えなさい。

問八、——⑧「勝ち負けをはっきりさせることを、終わりの合図にしてはいけない」とありますが、その理由を説明している段落の最初の五字を答えなさい。

問九、——⑨「相手の心と自分の心の深い愛情のかたち」とありますが、その説明としてもっともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア お互^{たが}いが、自分の本音をぶつけながらも、相手を立てるべきところをわきまえようという気持ちをもっているということ
- イ お互^{たが}いが、この議論の、何が正しいことなのか、はっきりと答えを出したいという気持ちをもっているということ
- ウ お互^{たが}いが、このぶつかり合いのために、相手に嫌^{きら}われないように我慢^{がまん}しようという気持ちをもっているということ
- エ お互^{たが}いが、相手の意見に自分の意見をうまく合わせて結論を出すようにしようという気持ちをもっているということ

問十、本文の内容としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 喧嘩の結論は絶対に相手にゆずってはならない
- イ 仕事の仲間との意見の違いはあってもはならない
- ウ 大切な人との意見のぶつかり合いはよくない
- エ 意見をぶつけ合わないといものは生まれない

問十一、——A「存分」・B「組織」・C「策」の漢字の読みを答え、D「キュウシュウ」・E「マカせる」のカタカナを漢字に直しなさい。

受験番号	
	氏名